

マキバノハナゾノの存続にご協力ください

私と金一さんとの付き合いは2013年4月に始まりました。震災翌年の2012年にNPO法人ふくしま再生の会と佐須地区で実施した田んぼの除染実験の結果を受けて、さらに放射線量の高い小宮地区の田んぼで実験させてほしいとお願いしたのがきっかけでした。その時から大学院生やNPO法人の関係者が足しげく通うようになりました。そうしたいろいろな人との出会いに感謝の意を表したいという思いから、金一さんの「マキバノハナゾノ計画」が生まれ、ひとり黙々と花を植えてきました。今では毎年多くの方々が美しい花々を見るために訪問するようになってきています。しかし、この花たちは金一さんの手弁当で管理されています。

そこで、皆様へのお願いです。

マキバノハナゾノを維持管理するためにいくらかのお心遣いを頂けたら幸いです。集まったお金は肥料やトラクターの燃料代などに使わせて頂きます。

よろしくご協力を賜りますようお願い致します。

自称マキバノハナゾノ保存会代表・溝口勝（東京大学大学院農学生命科学研究科教授）



広報いいたて 平成29年4月号

●ひとかたるものがたり● 第1回

大久保金一さん（小宮）



大久保さんは、四季折々に花に囲まれる「マキバノハナゾノ」をつくろうと、震災前から、農業を営むかたわら自宅周辺に花を植えています。

があれば苗を植える時だけ協力ください。花づくりを通して知り合った全国の友達も協力してくれて、その参加者は120人になりました。

母は実証への協力にずっと反発していた。「誰もやったことのないことをやるなんて」。穂ばらみ期になると「とれるものか」と言った。それでいながら田植えの時には「かっこよくしたか」と気にした。

つらかったのは、収穫した米を捨てさせられたことだ。顔で笑って、心で泣いた。それでも、続けた。

一昨年、母が亡くなった。大学の先生や新聞記者、何人もの人が、母のために足を運んでくれた。ありがたく、また誇りにも思えた。

母も、分かってくれただろうか。「マキバノハナゾノ」をつくろうと、ずっと夢見てきた。2年前からは、東京大学の学生たちが、手伝ってくれた。バラを植えてみたいという学生がいたので「飯館花壇」（詳しくはP25）には、たくさんの種類のバラを植えてみた。

いろいろな人が花を見に来て、声をかけてくれるようになった。今は福寿草。これから、水仙、モクレン、水芭蕉と、開花が続く。花園づくりの夢を、俺はこれからも見続けようと思う。

測定した。

周りの人から「いくらもらっているんだい」と聞かれたりもした。そんなつもりは全くなかった。宗夫さんに話すと、「そういう人の気持ちも、理解することが大事だよ」と言われた。…そうだなあ、と思った。

それから俺はいろいろ考えて、「東大の先生が、こんな田舎に来ることはない。このできごとを何かに残したい」と考えるようになった。

稲刈りの時に、その考えを話した。「桜の苗を植えたい」と。先生方に負担をかけては意味がないので、自分にやらせてほしい。興味

震災の年は、草刈りのため、仮設住宅から1日おきに自宅に通っていた。高齢の母がいて、通うのは一苦労だったが、自宅の部屋で寝転ぶのは気持ちよかった。雨どいを外し、屋根や壁を拭き、測って確かめながら、自宅周りの線量を下げた。軒下の土も削ってきれいな土で覆い、翌年、もう一度削った。

その頃、村内の線量を測っていた菅野宗夫さん（佐須）が、東京大学の溝口勝先生とやって来て、その米づくりの実証に、思いがけず参加することになった。水田を3つに区切って、代掻きや水の流し方を変えながら行う米づくりの実証だった。沈んだ泥や地下水への影響も